

10. ^{131}I -MAA 肺スキャンニングにて経過観察を行なった肺癌について

○有川憲蔵 篠原慎治
(鹿児島大学放射線科)

われわれは最近肺門型肺癌患者の2例において ^{60}Co 放射線治療の前後に胸部X線検査と ^{131}I -MAA 肺スキャンニングとを平行して行ない治療前後におけるX線像の変化に伴う肺シンチグラムの推移の点で興味ある所見がみられたので報告した。

第1例 45才。♂。組織診断：燕麦細胞癌。

第2例 60才。♂。組織診断：小細胞癌。

2例ともに ^{60}Co 治療前後の肺シンチグラムにおいては胸部X線像の改善に比して著明な肺血流分布の改善が認められた。これは肺動脈幹部におけるTumorによるocclusiveなprocessが放射線治療により改善されてきたことが、肺シンチグラムで良く示現されかかる症例の場合肺シンチグラムにてfollow-upして行くことの有用性を感じた次第です。

質問：前田辰夫（九州大学放射線科） hungen krelisが ^{60}Co 治療後シンチグラム像の改善があったとの報告ですが、そのあとRezidivがおこりレ線像ではっきりしないうちにシンチグラムで所見をみとめたというのがあるときさらにももしろいのですが、そのような症例はおもちゃになりませんか。

質問：村上晃一（九州大学中央放射線科） ^{60}Co 照射後 ^{131}I -MAAによる肺シンチグラム像上、肺血流の改善が認められる症例のご報告でしたがこれは、このような症例が珍しく例外的であるから報告されたのかむしろ一般的であるから報告されたのかおたずねしたい。

追加：蓮田 威（熊本大学放射線科）一般に転移性肺癌の ^{131}I -MAAによる肺シンチグラムでは、異常所見は出しにくいといわれておるが、当科でFibrosarcomの肺転移例で、レ線像に先行して肺シンチグラムで右上葉に大きな打点欠損を示した例がある。

*

11. ^{131}I -標識 Fibrinogen の悪性腫瘍診断への応用

高木英年
(久留米大学放射線科)

われわれは約7年位前より ^{131}I 標識 Fibrinogen, Anti-fibrin, Anti-fibrinogen にて一連の動物実験を行ない、

悪性腫瘍では明確なシンチグラム陽性像をえるが、良性腫瘍では明確でなく、悪性腫瘍診断への応用の可能なことを明らかにしている。さらに ^{131}I 標識Antifibrinogenにては人体応用も試み各種の人体悪性腫瘍にてかなりの好結果をえている。これらのことからさらに改良した ^{131}I 標識 Fibrinogen を、動物悪性腫瘍および人体に応用し追跡研究中であるのでその一部を報告する。

*

12. ^{51}Cr を用いた胃腸管内出血量の測定

紫藤忠博 片山則孝 河北靖夫
(熊本大学河北内科)

1950年 Gray and Sterling により、 ^{51}Cr を血液に混じり解置すると、 ^{51}Cr は赤血球にとり込まれ。主にGlobinの β 鎖に結合することを認め、Mollison らは *in vitro* で赤血球を $\text{Na}_2^{51}\text{CrO}_4$ で標識し赤血球の寿命測定に利用し、さらにBannerman らはこれを胃腸管内出血量測定に応用した。貧血はその発性機転から、赤血球の過剰消失、すなわち出血、溶血等による貧血と赤血球の補給減弱、すなわち欠乏性あるいは骨髄障害性に起こる貧血とに大別できる。100~150 μC の ^{51}Cr を用い、貧血発生に影響をおよぼす程度の胃腸管内出血を測定し一方、赤血球寿命の測定をもあわせ行ない、さらに骨髄の造血状態を骨髓像、血液像により鑑みながら各種貧血疾患につき検討を加えた。胃腸管内出血量の測定には次式を用いた。

一日の胃腸管内出血量＝

$$\frac{\text{一日糞便内全放射能 (cpm)}}{\text{排便前日の流血1ml当りの放射能 (cpm)}}$$

今回は、これらの術式、基礎的吟味および各種貧血疾患における測定結果について報告する。

質問：中川昌壮（熊本大学第3内科）

1) 演者もおっしゃいましたとおり、出血のある症例について寿命という言葉は望ましくないと思います。

2) Life spanの測定は生成と崩壊のstationaryのstateで測定すべきであり、貧血のつよい症例で生成が盛んな症例とか再生不良性貧血症例で輸血を行なうような症例での寿命ということも検討を要すると思います。

*

13. ^{75}Se -Methionine による脾スキャンニング

浦崎政康
(熊本大学放射線科)

脾スキャンニングは、脾疾患の診断に有用な情報を与え

る検査法として、その価値が認められてきつつある。

著者は ^{75}Se -Methionine を用いて膵スキャンニングを試みたのでその一端を報告する。

^{75}Se -Methionine $250\mu\text{Ci}$ を静注し、5 分後にスキャンニングを開始した。スキャンナーは東芝製 RDA-106-6 で Detector は、 $3\times 2\text{in. Crystal}$, Collimator 10cm focus の Honey Cone Type である。記録法は、マルチドット、カラー、フォート同時三方式で記録した。

スキャンニングを行なった30例のうち、28例は描出に成功したが、描出されなかった2例のうちの1例は肝臓で膵におよぶ病変が手術により確認され、残りの1例は、胆嚢、および小腸と思われる部位に activity が増加して膵影を不明瞭ならしめていた。

描出された膵影を king の分類にしたがってわけると、Horseshoe 9 High transverse 9, Sigmoid 9 例で他の1例は膵癌のため変形していた。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

14. ^{85}Sr に関する研究

吉井弘文

(熊本大学放射線科)

当教室での老若差による Isotope の吸収、排泄の一連の研究の一環として、また骨シンチグラムの基礎的研究として、 ^{85}Sr のラッテにおける主要臓器への摂取状況、および尿尿への排泄を検討した。

骨は静注後6時間目の7.6%を最高として、以後経時的に少しずつ減少するが、その他の臓器では、静注後1時間目を最高として、その後急減した。1日目には骨以外の臓器ではほとんど痕跡を認めるにすぎなかった。

尿、尿への排泄は第1日目は約1/4分のが排泄され、およそ10日目には50%の排泄を認めた。